

## [研究ノート] ルース・ベネディクトの「模索時代 (1920-1930年)」の解説に表れるマーガレット・ミ ードの私的見解

その他のタイトル	Margaret Mead's Personal View of Ruth Benedict Found in "Search : 1920-1930"
著者	菊地 敦子, 福井 七子
雑誌名	関西大学外国語学部紀要 = Journal of foreign language studies
巻	20
ページ	109-126
発行年	2019-03
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/16839">http://hdl.handle.net/10112/16839</a>

# ルース・ベネディクトの「模索時代（1920-1930年）」 の解説に表れるマーガレット・ミードの私的見解

## Margaret Mead's Personal View of Ruth Benedict Found in "Search: 1920-1930"

菊地 敦子      福井 七子  
Atsuko Kikuchi      Nanako Fukui

Every description is a description from a particular point of view. In a section called "Search: 1920-1930" in *Anthropologist at Work*, Margaret Mead describes the turbulent years at Columbia University between 1920-1930. In her description of Franz Boas, it is clear that Mead had great respect for Boas' commitment to anthropology and his courage to stand up for his beliefs. On the other hand, Mead puts a little too much emphasis on how anthropology saved Benedict from her boring middle class domestic life with her self-absorbed husband. The word *search* in the title of this section not only refers to Benedict's search for something that gave meaning to her life, but also to Boas' search for patterns in different cultures, and search for the role of anthropologists in times of war.

### キーワード

M. ミード, R. ベネディクト, コロンビア大学文化人類学科, H. ラプスレー, M. ペイトソン,  
M. カフリー

### はじめに

本論では文化人類学者マーガレット・ミードが友人でもあり、師でもあったルース・ベネディクトの死後10年を経た1959年に、ベネディクトが遺した論文、日記、そして膨大な書簡などをミードの視点によってまとめた *Anthropologist at Work* (Houghton Mifflin Company, Boston) のなかの Search:1920-1930 (5-17頁)、(模索時代:1920年-1930年)を翻訳し、そこにみるマーガレット・ミードの書き方やベネディクトに対するスタンス、そして視点などを読み解いてみたいと考え、研究ノートとしてまとめたものである。*Anthropologist at Work* に収録されているのは、大半が論文や日記などベネディクトの手によるものだが、「模索時代」はマーガレット・ミードが書いたものである。「模索時代」は1920年から1930年を中心に書かれて

おり、後にも触れるがコロンビア大学でも文化人類学という学問がまだ確固たる地位を得ていない時代であった。ベネディクト自身も強烈な意気込みをもってコロンビア大学に入ったわけではなかった。

*Anthropologist at Work* が書かれた1959年という時代は、ミード自身がフェミニストとして著名になっていった時期である。そういった時代経過があることは、彼女の書き方やスタンスにも影響を与えたと考えるのが自然であろう。30年という時代を経てミードは世界的に有名になり、彼女の生き方は新進気鋭の女性の騎手として社会の注目をあびる影響力あるものであった。そのためこの「模索時代」は、ミード独特の書き方が表れており、そこには独断的な側面も見え隠れしているように思える。そこで翻訳を通して透けてみえる彼女の心の内側に焦点をあててみたいと考えたしだいである。

なお、翻訳文の中で現在差別的だと考えられている語がある。しかし本論では、本文の通り訳したことをお断りするものである。

## I

ミードは戦後フェミニストの最前線に君臨し、その生き方や考え方は女性史やフェミニズムの分野でパイオニア的存在であった。ミードは今日も多くの研究者にとって魅力的な素材を提供し続けている。1999年に心理学者であり女性史研究者であるニュージーランドのヒラリー・ラブスリー (Hilary Lapsley) は *Margaret Mead and Ruth Benedict -The Kinship of Women* (『ふたりの恋愛が育んだ文化人類学—ルース・ベネディクトとマーガレット・ミード』、明石書店、2002年) を出版している。ラブスリーはミードとベネディクトをどのような視点でとらえ、またどのように考えていたのだろうか。

私たちの文化における明白で日常的な性差別と、それに近いところであるホモファビア (同性愛恐怖症) は、女性間の友情がほとんどその真の価値を認められていないことに対する大きな原因になっている。女性の生きざまを説明するときはほとんど、男性との関連性が、助け合ったあるいは邪魔になった証として、また競ったり避けたりする見本として、はてしなく検証される。……ポーヴォワールとサルトルの関係は、ミードとベネディクトの関係と比較すると興味深い。ポーヴォワールは、自分の生き方を「自由な人生」として発展させた。ミードとベネディクトの友情が、なぜ、同じくらいの賞賛と検証を受けていないのか、と尋ねる人がいても当然だろう。ポーヴォワールとサルトルは、知的な生活を共有し、感情間で支え合い続けるという関わり方をしていたが、ミードとベネディクト同様、そこには排他的な部分はなく、家庭も築かれず、連続した性的な関係もなかった。実際、ポーヴォワールのサルトルへの告別の言葉は、ミードのベネディクトに対する墓碑銘に著しく似たかたちで始まっている。「これは、私が書いたものの中で、間違いなく、あな

たが読まない最初のただ一つの記事だ……」(ラブスリー：18)

ラブスリーの著書はベネディクトとミードの友情の深さを書きながら、ベネディクトよりミードに焦点を置いたものとなっている。彼女たちをどのように捉えるかは、彼女たちの性格、生活、価値観、そして時代を抜きにして語ることはできないだろう。ラブスリーはこのようにも書いている。「……ミードとベネディクトが恋人であり続けたということ、愛情に満ちた両親の回顧録において明らかにしたのは、ミードの娘メアリー・キャサリン・ベイトソンだった。」(ラブスリー：18-19) キャサリン・ベイトソンは確かに『娘の眼から』(ベイトソン：1993) 両親であるミードとベイトソンを愛情深く書いている。しかし同時に感じるのは、両親に対する尊敬の気持とともに、ミードに対しては娘にしか書き得ない厳しい眼が著書全体から感じられる。ミードにとって重要だったのは社会人、職業人としての自分の立場だったように思える。ミードの娘が若い頃、同性愛に傾くようなときがあった。それを知ったミードは、「おまえのスカンダルが暴露されたら私のプロフェッショナルな生活はどうなるの」(ベイトソン：1993：223) といい、決して娘を認めることはなかった。ミードは一人の人とのみ付き合い続けることに価値を置かなかった。そして男性にも女性にも惹かれ、セックスとは関係の親密さを表わす当然で、自然な行為と考えていた。それほどオープンで、陽気で奔放な人生を送ったミードを見ても明らかのように、女性が社会に進出するためには、時代の因襲的なバリアは容易に壊すことができないほど強固なものがあった。これはミードだけの問題ではなく、まさに後に文化人類学者となるベネディクトの戦いはここに始まるといっても過言ではないだろう。

ラブスリーの著書 *Margaret Mead and Ruth Benedict -The Kinship of Women* 『ふたりの恋愛が育んだ文化人類学—マーガレット・ミードとルース・ベネディクト』でもうひとつ気になることは kinship を恋愛と訳したことである。「ふたりの関係、あるいは師弟関係」では十分だと感じたのかもしれない。確かに「恋愛」は刺激的な言葉であるが、ミードとベネディクトの友情関係は一生続くが、恋愛関係が一生変わらなく継続したわけではなかった。

一方、別のアングルからベネディクトとミードについて注目し、ベネディクトとミードを取り上げた女性がいる。メンフィス大学で女性史を教えているマーガレット・カフリーは1989年に著書 *Ruth Benedict: Stranger in this Land* (邦訳『さまよえる人—ルース・ベネディクト』) を書いた。著書を通して感じられるのは、マーガレット・ミードに対する容赦ない厳しさである。カフリーはミードを個人的には受け入れ難く思っていることも事実である。ミードはベネディクトを manipulate していると感じていたようである。

こうした様々な評価があるが故に、彼女たちのペールを取り去り、実像に迫ろうという研究が多いのもうなずけるだろう。

## II

1920年ころからコロンビア大学ではベネディクトの師であるフランツ・ボアズが人類学のヘッドとしてまさに八面六臂の働きをしていた。

1920年のコロンビア大学の文化人類学部は、かなりごたごたを抱えていた。戦争中、平和主義を唱えていたボアズは、彼がドイツ系であるがゆえにこの時期の熱狂的な標的となった。彼は第一次世界大戦に対して同情心を持たず、科学という「名目」で諜報活動が行なわれていることに対して、相容れない感情を抱いていた。(中略)ボアズは一つひとつの講義をあたかも何百人もの同僚に聞かせるかのごとく準備をしていた。

ベネディクトがコロンビア大学に入ったのは1921年であった。そして1923年には博士論文となる *The Concept of the Guardian Spirit in North America* 「北アメリカにおける守護霊の概念」(仮題)を書き上げた。気難しいボアズのもとでベネディクトは必死にボアズから文化人類学を学んだ。ミードはその頃の様子を次のように書いている。「ベネディクトがボアズのもとで学んだ時期と私(訳者注:マーガレット・ミード)がボアズのもとで勉強した時期はほぼ同時期だったが、ボアズは近付き難く、ベネディクトを介さなければ親しくすることはできなかった。ベネディクトのボアズに対する情熱によって、ボアズとの距離は近くなった。」ミードによれば、ベネディクトが文化人類学に初めて出会ったとき、彼女は本当のキャリアをさがしていたのではなく、何か毎日に意味を持たせるものを探していたのである。コロンビア大学でボアズの講義をベネディクトは1923年から1925年の間出席し続けた。何事にも控えめであったベネディクトがセミナーに積極的に参加した。ベネディクトの文化人類学のベースはこのように形成されていった。

## III

菊地敦子先生とともに翻訳の仕事をし、長編 *Anthropologist at Work* も一応その全貌が見えてきた。にもかかわらず、見返してみると舌足らずの表現がそこそこにある。この「模索期間」の翻訳についてはおよそ8年前に終わっていた。しかし、皮膚感覚として理解し得ていない部分が少なからずあることがわかった。この「模索期間」はベネディクトが文化人類学者として認められる過程や、家族(主として夫)との確執が生じはじめ、ベネディクトにとってまさに模索し、悩みながらも生きがいとしての彼女の道を探し求めた非常に重要な箇所である。そうしたことを感じるができるようになったのも、菊地敦子先生の力に負うところが大きい。菊池先生の日本語能力は8年前とは格段に変化し、目を見張るほどの進化を遂げている。それ故生半可な表現や内容は一切排除し、linguist としても接続詞ひとつにもこだわり、「ここでどうして however が使われているの?」と自問自答しながら前後関係を洗いなおしながらもう一度やり

直したのである。

この論文を研究論文とはせず、研究ノートにしたのにはいくつかの理由がある。最初に述べたように、マーガレット・ミードの文章の書き方、ベネディクトに対する思いなどを本文に則って翻訳し、彼女たちの言葉のニュアンス、なぜその言葉が使われたのか再度試みた翻訳から感じ取っていただけるものにしたと思ったからである。こうした研究はのちの研究論文の下支えとなるものと確信している。

## 翻 訳

### 模索期間：1920-1930

マーガレット・ミード

「私は職を必要としないほど強い心を持ってはいないわ」とルースは悲しげに微笑みながら、よく言っていた。それは彼女が文化人類学を始めた初期のころであった。結婚しており、子どものない女性にとって、文化人類学はれっきとした仕事で、彼女が時間を埋めるには適当な仕事であった。しかも、自分の多くを捧げる必要もなく、大きな想像力が求められるものでもなかった。仕事に対する彼女の情熱は、最後まで消えることはなかったが、特に目覚しかったのは初期のころであった。33歳で大学院に入ったとき、それは自分の人生を賭けたものではなく、研究は人生のほんの一部でしかなかった。そして30代後半においても、彼女は時折記していたジャーナルに次のように書いている。「私は自分のための人生と世界のための人生という二つの人生を生きる力があるかどうか賭けてみた。その結果、自分の人生を語るとき、それが文化人類学を始める前の人生、あるいは後の人生を語るにしても、一つの観点からのみ自分の人生を語るということは非常に不完全なものになると思ったのである。」彼女は私たちみんなを別々の部屋に入れて、彼女だけが一つの部屋からもう一つの部屋に移り、だれも彼女について行ってその様子を記すことはなかったのである。私はニューハンプシャーにある彼女の別荘を一度訪れたことがあり、彼女のご主人には三回会った。シェナング渓谷にあった彼女の農場は見たことがなかった。彼女の生存中、お母さんと妹さんに二度しか会っていないし、彼女の親しい友人の何人かには会ったことがなかった。これらの人々は彼女の人生の別の部分に存在し、文化人類学と詩はこの人たちが訪れることがない別の世界に存在したのである。

私が彼女に始めて会ったのは1922年の秋で、バーナード・カレッジの2年生の時だった。ボアズ教授はまだ学部の大教室で教えており、ベネディクトは授業で用いられる資料を見せるために彼のアシスタントをしていた。1909年にヴァッサー・カレッジを卒業し、1914年にスタンレー・ベネディクトと結婚するまでの間、ルースは女学校で英文学を教えたことはあったが、大学で教えるのは初めての経験であった。ボアズ先生の授業を履修し、学び始めて最初の数週



間で、私は文化人類学のとりこになった。ボアズ先生は小柄な体に大きな頭の人で、昔の決闘によって受けた傷によるあざがあり、顔面麻痺により片目は下がっていたが、私が今まで習った先生にはないような独特さと威厳をもって話した。彼は学生を鼓舞するものだと信じていたのだが、彼の威厳と揺るぎない正義感は、学生を結果的に怖気づかせるものであった。彼らしさを表している出来事として、彼は絶えず質問を投げかけていたが、学生はそれに答える勇気がなかった。私はその質問の答えを書き記し、その答えが正しいとわかると、嬉しさを顔に輝かせたのだ。そしてボアズ先生は私ともう一人の学生に試験を受けなくてもいいと言った。理由は授業中のディスカッションによく参加したからというものだった。

マリー・ブルームフィールド<sup>1)</sup>と私は、ベネディクト夫人と呼ばれているベネディクトと仲良くなろうと決めたのだが、他の学生たちはベネディクト夫人のはっきりしない態度、そしていつも代わり映えのしない服装を揶揄していた。色々な資料に興味を持ち始めていた私たち二人にとって苦痛だったのは、博物館での授業であった。平原インディアンが展示されているホールにある Sun Dance (太陽の踊り) の模型に関するとても興味深く、しかし、つかえつつかえの説明を聞いたあと、私はもっと知りたくてそれについて質問すると、すごく失礼な厳しさを相手にしてくれなかった。それでもしつこく要求すると、ベネディクト先生は真っ赤になり、次の時にその資料をくれると言った。そしてくれたのが、彼女が最初に発表した論文“The Vision in Plains Culture”「平原インディアンの文化における幻視」であった。<sup>2)</sup>それは彼女の名前が印刷された出版物であり、自分が何かを書いたということ自体が苦痛のようであった。ベネディクトが Human Nature and Conduct <sup>3)</sup> という本について発表するということで招待してくれた時、その内容については賛同したが、彼女のシャイなところと、はっきりものを言わないという点については不満を抱いた。ベネディクトがシャイな性格を乗り越えて威厳をもって流暢な話し振りができるようになるまで何年もかかった。そして流暢な話ぶりについては自分自身も驚いており、そうした折にははずかしがって言葉を付け加えることが多かった。

一学期の終わりには、私はこの授業の熱狂的なファンになり、それについて絶えずキャンパスで話していたため、登録する学生数は倍になった。北西海岸の美術とトダ族の親族関係のシステムに関する生き生きとした説明をベネディクトが加えることで、ボアズの各時代を経た人間の進歩に関する講義が生命を得て、明確で秩序だったものとなったのである。学生であった私は、ボアズ先生から得た知識によって、未開人が長い腕の下に火をもやす枝をもったイメージを抱くことができるようになり、そこからベネディクトと文化人類学と詩に移行することができた。初めて色々なことが腑に落ちた思いがし、今の時期にボアズ先生から早急に色々なことを学ばねばならないことをベネディクトに教わった。というのはその年でボアズ先生は退職される可能性があったからである。そうすると、人々が作り上げた複雑なパターンがこの世から失われ、もう取り返しがつかなくなるとベネディクトは言った。そのため、私はボアズ先生のすべての大学院のコースに参加するようになった。それは5～6人のクラスであった。先生

は大学の事務的手続きを全く気にしない人で、学部生でもとりたいた授業を取らせてくれる先生であった。

ベネディクトの夫は、生物化学者として名声が上がるにつれて、自分の直属のアシスタント以外とは徐々にコンタクトを持たなくなっていた。そういう夫との7年間の子どものいない生活の後に、彼女は文化人類学を見つけたということの後から知った。ベネディクトの大学の同世代の人たちを巻き込んだ運動に彼女は興味を示さなかった。女性解放を大きな問題としてとらえることに全く興味を抱かなかつたし、女性に対する教育については、すでに解決済みのことで、彼女の母親の世代の出来事だと彼女は思っていた。彼女にとって社会運動とは、恵まれない人たちに田舎暮らしをさせてあげることだった。「でも、もちろんスラムに住んでほしいということではない」とあわてて付け加えるのであった。世界大戦は、人間の希望が容赦なく破壊される例だと彼女は思っていた。その気持ちを彼女は詩「ルパート ブルック」“Rupert Brooke, 1914-1918”<sup>4)</sup>に記している。

Now God be thanked who took him at that hour,  
Who let him die, flushed in an hour of dreaming.  
Nothing forever shall have any power  
To strip his bright election of its seeming.  
He is most blest. There was great splendour dying,  
Then when our faith made all man's hell a cleanness,  
Then when our vision flashed like strong birds flying  
Before we had known victory and its meaning.

We are wise now and weary. Hopes he knew  
Are perished utterly as a storm abated.  
One mocker yet shall leap as flame wind-taken  
Down dreadful years: Unknowing what they do.  
Our sons shall chant his words, and go elated,  
Dying like him; like him with faith unshaken.

彼女はペンネームを使って詩を書き、そのいくつかを出版したが、書いたものをだれにも見せなかった。詩というのはだれかに足を踏まれた時痛いと言うようなものだと彼女は説明していた。結婚して最初の年に住んでいたダグラス マノーでのコミュニティ活動はあまり意味をなさなかった。日曜学校でイエス・キリストをブリタニカ百科事典で調べるように言って首になってしまった。スタンリーは長い休暇をとるのが好きだったので、<sup>5)</sup>ニューハンプシャーでの初



めの2週間は楽しかったが、その後は退屈だった。彼女は肉体的にも強く、何でも簡単にやっ  
てのけたので、別荘での家事も一時間もせずに終えてしまった。しかし、憂鬱であることを隠  
されねばならず、憂鬱が消えるまで一日をなんとか過ごさねばならなかった。冬の間、彼女は  
様々なことをやってみた。有名な女性の伝記にとりかかり、メアリー・ウォルストンクラフト  
について書き始めた。<sup>6)</sup>ある冬はリズム体操をかなり熱心にやっていた。大学の友人、ソフィ  
ー・タイズを通して州の慈善援助協会のボランティアとして働き、様々な事例の履歴を分析し  
ていた。この頃彼女は、それぞれが特別な情熱を持っているということで選んだ友達が一人ま  
た一人とオーソドックスな社会の暗闇に消えてゆくのを見た。その暗闇は、社会的にはクリス  
チャン・サイエンスであったり、ハイチャーチアングリカンミッション (訳者注: 高教会派で、  
儀式を重視するアングリカンチャーチの一派) だったり、進歩的な教育であったり、心理分析  
であったりした。そして彼女には子どもは生まれなかった。

文化人類学に始めて出会った時、彼女は本当のキャリアを探していたのではなく、何か自分  
の毎日に意味を持たせるものを探していたのであった。スタンレーはひしめきあった近所や都  
会の生活に嫌気をさしていたので、ベッドフォード・ヒルズに引っ越した。汽車の汽笛がうるさ  
かったにもかかわらず、彼はそこで安らかに眠ることができた。心理分析はようやく人々に知  
られるようになってきていた。少しでも異常な人がいたなら、その人は心理分析を受けねばな  
らないというプレッシャーが年々強くなっていった。ベネディクトがいかに鬱で、助けを必要  
としていたかを知っている友達はそれを案じてベネディクトにアドバイスをし、手紙を書い  
ている。<sup>7)</sup>

あなたが森の中で孤独を味わい、本を読んでいることを知り、喜んでいきます。遊んだり、  
外に行ったりして下さい。あなたとスタンレーは頭が良過ぎて、働き過ぎです。早く年を  
取り過ぎないようにして下さい。来年は村に移り住み、楽しい時を過ごし、情事もお楽し  
みなさい。人生には失うものはなく、ただ継続あるのみなのです。だから今の瞬間を生き  
ることが大事なのです。あなたにとって心理分析から得られるものは多いことでしょう。  
色々な意味で、あなたは抑圧されている人なのです。あなたは二つの性格を意識的に作り  
上げています。一つはパブリック、もう一つはプライベートなものです。でもそのひずみ  
はかなり大きいはずで、あなたにそれができないと言っているのではなく、さぞそれは  
疲れることだろうと言っているのです。そして学問は、たとえ世界にとって重要であって  
も、あなたには逃避になりがちです。どのようなことも必ず負の面が共存しています。で  
も知的な達成はあなたにとってかなり価値があるのでしょうか。人生とは空虚なものです。  
一瞬、一瞬に意味を与えようとしてもしかたがないことです。

1919年、ベネディクトは ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチで行なわれて

ルース・ベネディクトの「模索時代(1920-1930年)」の解説に表れるマーガレット・ミードの視点(菊地・福井)

いるいくつかの講義に出席することに決めた。このニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチは、そのころまだ出来たばかりで、社会的、政治的に相容れない行動のために、どこかで教えるには不適任と判定された優秀な人たちの新しい考え方がふつふつと沸き始めているような教育機関であった。中年にさしかかった人たちが、仕事のために学校に行けなかったり、学校に行くことを延期せざるを得なかったりした人たちが、今まで知らなかったことをそこで学ぶことができた。ニュー・スクール・フォー・ソーシャル・リサーチで教えている先生のなかには、アレキサンダー・ゴールデンワイザーもあり、彼は第一次世界大戦前に花開いた世代の文化人類学者のなかでは逸話が多い人であった。また、エルシー・クルーズ・パーソンズもそこで教えていた。彼女はジョン・メインという男性のペンネームを使い、*Social Rule* や *The Old Fashioned Woman* といった本を通して、大胆で挑発的な主張を展開した。<sup>8)</sup>

ゴールデンワイザーは気まぐれで、文化に関するアイデアには非常に関心を持っていたが、フィールド・ワークの詳細な事柄に対しては我慢ならないと考えている人<sup>9)</sup>で、アメリカの文化人類学者のなかでは最初の試みであった文化を一体として捉えた本を書いていた。1922年の秋に彼の *Early Civilization*<sup>10)</sup> が出版された。彼の講義は大胆で、「赤く塗られたメラネシアの文化」やヨーロッパのゴシック建築の繁栄と衰退を生き生きと、しかし自己流で説明した。類まれなるプレゼンテーションの仕方は、正確性を欠いていることを忘れさせ、学生のイマジネーションを掻きたて、彼は学生が自分の魅力のとりこになっていると思っていた。

ニュー・スクールを通して文化人類学を学び始めたルース・ベネディクトとメルヴィル・ハースコヴィッツは、ゴールデンワイザーに関心を持った。彼の本は学部生が文化とは何かという感覚が得られる最初の本であり、ゴールデンワイザーは自分の講義によって興味を掻き立てられた学生に対して、彼にしかできないような独創的な対応をとるのであった。ルース・ベネディクトは彼から学んだことを大切にしていたが、彼の子どもじみた、威張った態度に対しては苦慮し、そういった彼の性格に対しては全く理解を示さなかった。<sup>11)</sup> パーソンズ夫人の講義は、文化人類学という学問が注意深く細部の情報を集め、分析することから成り立っているという発見に基づいており、のんびりした中にきらりと光るものがあるゴールデンワイザーの教え方とは大きく異なっていた。文化人類学とは、時間、場所、部族というレッテル付けされた小さな事柄を集めたものであることを学生はパーソンズ夫人から学んだ。それは何時間もの苦しい労力と献身の結実なのである。

人生のすべてにおいてきちんとすることが好きなベネディクトにとって、文化人類学が初めて「意味」あるものとなった。ニュー・スクールの同級生は、ベネディクトのことをベネディクト夫人と呼んでいたが、ご主人はいつも不在であった。他の学生から見ると、ルース・ベネディクトは非常にやさしい雰囲気、ほっそりとしており、髪は若白髪で、いつも乱れており、何気ない服装の中にも洗練されたものがあった。彼女は耳が悪く、実際にはかなり聞こえていないにもかかわらず、それにすぐに気づかれることはなかった。その上見ていられないほどシ

ヤイであった。若い時にはきれいだったが、不確実性やぎこちなさによって彼女の美しさは霧に包まれているようであった。彼女がニュー・スクールで課外活動に参加していたということは、後にフランク・タナンボームやローレンス・K・フランクとどのようにして知り合ったのかということ述べている際に初めてわかったことである。彼女は色々なグループから孤立しており、他の人と会うのは夫の同僚とたまに食事をする時や、一対一でだれかと昼食や夕食をとる時だけであった。

そして1921年にベネディクトはコロンビア大学に入った。ボアズ教授がいつものように事務的な手続きを無視して、ニュー・スクールでの彼女の単位を認めさせることに成功し、彼女は博士論文「北アメリカにおける守護霊の概念」<sup>12)</sup>をさっさと書き上げた。ベネディクトがボアズのもとで学んだ時期と私がボアズのもとで勉強した時期はほぼ同時期だったが、ボアズは近づき難く、ベネディクトを介さなければ親しくなることはなかったと思う。ベネディクトのボアズに対する情熱によって、ボアズとの距離が近くなった。彼と学生の関係は、父と子のようなもので、私たちは孫のような存在であった。後に私たちは彼を、「パパ・フランツ」と呼ぶようになった。ベネディクトは1923年～1925年の間、ボアズの授業に出席し続けた。セミナーに積極的に参加し、私は彼女の隣に座り、彼女が聞こえないディスカッションの部分を書き取り、そのおかげでノートを速く書く技を身につけた。これは後々に役に立つこととなった。ベネディクトがコロンビア大学で学んだことが後の彼女の研究にどのような影響を与えたかを論じる際、私は1922年～1925年の自分のノートを参照し、同時に彼女が習ったばかりの知識、あるいはまだ学ぼうとしていることをどのように解釈したかを参考にした。

1920年代のコロンビア大学の文化人類学部はかなりごたごたを抱えていた。戦時中、平和主義を唱えるボアズは、彼がドイツ系であるがゆえにこの時期の熱狂的な感情の標的となった。<sup>13)</sup>彼は第一次世界大戦に対して同情心を持たず、科学という「名目」で諜報活動が行なわれていることに対して、相容れない感情を抱いていた。そして同僚や学生としばしば激論していた。アメリカ人類学会の会合では、暴力的な情景が繰り広げられ、帰国兵の若い文化人類学者が軍服姿で現れた時には大騒ぎとなった。

1922年には戦時中の騒ぎはおさまっていた。ボアズは教授であったが、学部はほとんど消滅しかかっていた。彼の研究は極端に削減されていた。バーナード・カレッジで学部の授業を担当していたが、コロンビア大学では学部の仕事がなかった。専任講師だったゴールデンワイザーが1919年に仕事を失った後、ボアズは学部で唯一のメンバーとなった。旧式のドイツ解剖専門家のブルーノ・オテキングはハイエ博物館に所属しており、形質人類学の科目だけを教えていた。プリンキー・アール・ゴダードはアメリカ自然史博物館で働いており、ボアズの忠実なファンであった。彼は博物館でテクノロジーに関する授業だけを教えていた。その他の科目はボアズ自身が教えねばならず、彼は理論と言語学、そして生物測定学を強行スケジュールで教え、初心者や予備知識を持たない人たちに対する配慮など全く欠いたものであった。生物測定

ルース・ベネディクトの「模索時代(1920-1930年)」の解説に表れるマーガレット・ミードの視点(菊地・福井)

学のクラスである日、彼が次のように言ったのを覚えている。「あなた達は計算法を知らない。だからそれを教えます。」そう言って残り20分しか時間がないなかで、それをやってのけたのである！言語学に関していえば、彼は言語科学の概論を簡単に説明し、その後すぐに難しいアメリカ・インディアン言語分析へと唐突に進むのであった。

講義のなかでポアズは世界中の部族について話したが、それら部族について誰が書いたのか、いつ存在した部族なのか、どこにいる部族なのかについては触れることはなかった。そして、「たとえ彼の話す口元の真横にすわっていても」、彼のドイツ語なまりの発音はわかりにくいものであった。参考文献をあげる時、彼はまずドイツ語で文献名をあげ、その後、英語で文献名をあげるのだった。そのため二週間以内にこれら文献に基づいてオランダ語、デンマーク語でレポートを書くことが要求されるのではないかといううわさが流れた。ポアズの明確で高度な抽象的表現と、講義のなかの理解できない詳細な点、そして講義内容に沿って全く整理されていない非常に専門的で技術的な参考文献に学生は戸惑うばかりだった。学部の中には、同じ科目を二度以上履修する学生も何人かいた。なぜなら履修するたびに内容が全く違っていたからである。その理由は、耐え難い過度の担当科目の量、そして言語学や民俗学のすばらしい研究の指導をしながらも、ポアズは一つ一つの講義をあたかも何百人もの同僚に聞かせるかのごとく準備をしていたからである。しかしながら、学生は、文化人類学の広い分野、たとえば原始美術や原始宗教といったことを学んだにもかかわらず、「方法論」についてはほとんど学ぶことはなかった。

ルース・ベネディクトが学部に入った頃、ポアズは一つの特徴が各文化でどのように伝播されるかに興味を持っていた。一つの特徴、あるいはテーマを選び、それがさまざまな文化のなかでどのように表れているのか学生に調べさせ、その特徴、あるいは特徴群がそれぞれの文化のなかでどのような変化を示すのか調査させていた。学生はあらゆる資料を読み、注釈をつけ、分析し、特徴がどのように分布し、あるいは統合されているのかを探った。一方、ポアズは講義のなかで全ての文化の起源が一つだという説、あらゆる形や変化も同一の起源を持っているという説がいかに間違っているかを指摘するのにやっきになっていた。ポアズは非常に厳しい口調で様々なことについて論じた。19世紀のイギリスの進化論者がイギリスを世界の文化形態の頂点に置いて他の文化を順序づけたことやラッツェルやハンチングトンのような地理的決定論者についても論じた。ドイツの分布論学派がタスマニアからティエラ・デル・フエゴまでの広範囲にわたるクルチュールクライセの存在を主張していたこと、かつてそのような単一文化が広い範囲にわたって存在したことを証明する証拠として同じような道具、家の形、社会的グループの配列が分布していると主張していたことについて語った。リバーズ、ペリー、そしてエリオット・スミスなどに代表されるイギリスの分布学派は、全ての高度文化はエジプトに起源を持っており、Children of the Sun (太陽の子)を通して世界中に広まったと考えていたことについて論じ、宗教理論、バステリアンのElementargedanken (原質思念)、またはデューク

ハイムの神秘的な集団性の概念についても語った。そして、「未開人」の心理と現代人の心理との間に根本的な違いがあるとする心理学理論、あるいはフロイト式に言えば、「偶然などの余地は残さないのだ」という心理学的決定論<sup>14)</sup>についても語った。

こういった議論のなかから学生は研究テーマを選んだ。私たちが学んだことをまとめるとすれば、「すべてのことが他のすべてと関係がある」ということで、セミナーのなかで現れてきた問題としてハースコヴィッツは東アフリカの家畜の文化をテーマに選び、私はポリネシア文化のなかのどの要素が相対的に根付いているかを扱った。そして選んだテーマの研究のなかで、「文化」というのは歴史の起源や、文化を取り巻く物理的環境を含んだ複合的なものとして扱われた。物理的環境は、文化を制限したり発展させたりすることはできるが、環境そのものは創造的なものではなく、その環境のなかで人間はいかなる人種であっても、またどのような言語を話していたとしても、そのなかで生きることを学ぶのである。歴史的接触、あるいは地理によって関係をもった未開文化の分布図を描くことによって、学生はそのような視点から特定のテーマを考えることを学んだ。したがって、ふたつの北米インディアンの種族を比べることは、北と南のアメリカ・インディアンを比べるのとは異なり、アメリカとアフリカの種族を比べるのとも全く異なるのである。形態をみるときは、たとえば斧の形を見る場合、男性とその息子を同じカテゴリーに属すると見なすとき、また神話のテーマが同じであると見るときも、隣接した社会にその形式、あるいはそれと似た形があるかどうか必ず見なければならなかった。同じ形式があるにもかかわらず、文化接触の可能性がない場合には、人間の共通の認識、あるいは共通の感情（例えば、ボアズ曰く「自分が描いた絵にだれかがツバを吐きかければ、どのような人間でも怒るに違いない」<sup>15)</sup>、そして個人、グループとして生き残るための術（すべ）から派生していると考えられた。講義の中では、子供が親を真似ることによってどんな文化も学ぶことが可能であることが強調されたが、それをどのようにして学ぶかについては注意が払われなかった。例外は、ボアズが「自動的行動」と呼んだもので、その行動は言語意識の深層にあり、人間がそれを変えようとしたり、疑ったりするようなことはできない意識下にあるものだった。結婚の形態は二つの性の違いによって自然に制限されており、道具の形は人間の手の形、そして脳の構造によって決定され、ジェスチャーは人間の身体の形、そしてコミュニケーションを必要としているという点において決定されるとボアズは考えていた。

文化というのはそれぞれの集団が習得した特有の行動で、いかなる文化も同等の尊厳があるものとして扱われた。ボアズは、文化の中心という概念を発展させること、つまりある種族は特定の、あるいは一般的な文化形態を統一させたり分散させたりすることの中心的な役割を果たしているという考え方に対しては好意的だった。しかし、中心からみれば「周辺的」とみえる種族も、その種族からみれば周辺的ではないのだ、ということをいつも強調していた。

文化の変化、例えば、ツボの縁にあるデザインの変化やバスケットを作る特殊な方法の変化、遊牧から農耕的な存在へと変化するという文化の変化について研究する際、形態の詳細な分



ルース・ベネディクトの「模索時代(1920-1930年)」の解説に表れるマーガレット・ミードの視点(菊地・福井)

析が必要だとされ、その変化がある方向に向かっているとか、ある方向に進歩しているという見方は厳格にチェックされた。ボアズは以下のような逆の流れの可能性を強調した。写実的なデザインが幾何学的なデザインに変わり得ること、たとえ変革が改善につながったとしても、その変革に対する抵抗があり得ること、そして宗教的文化形態に対する保守主義などの可能性を強調した。ボアズがインディアンあるいはアフリカの個人について語るのは、主として文化的情報の具体的所有者としてか、クワキユートル族のことを「私の親愛なる友人」と言ったときだけだった。そのような個人は、話の主人公だったり語り手だったりするのだが、その存在は、その文化が変化する過程を理解するためにのみ取り上げられた。

学生は、過去のすべての理論を過剰なまでに批判する術をボアズから学んだ。これが「方法論」と呼ばれたのである。また人間の成長、言語、美術、神話、宗教など、様々な分野の具体的で専門的な研究についても学んだ。これらは「課題」と呼ばれた。そして理論の中で検証されずに想定されている事柄を比較研究やフィールドワークによって分析し、評価しなければならないことを学んだ。それらすべてを包括する非常に広いパノラマがあることをボアズは示した。その中で光を放っている箇所はほんのわずかだった。どんなに小さい光でもその研究の理論的課題は、他の研究や理論的課題と確固たる関連性を持つものであった。いつの日か私たちは文化がどのように変化するかを知り、人間の遺伝子がどのように働くかを発見し、文化のなかでどのようにして宗教的考えが生まれたのか... を理解したら、そのパノラマ風景全体が光を放つことになる。しかし、それはあまりにも遠い未来のことで、ボアズは不確実な段階では何ひとつとしてコミットすることはなかった。にもかかわらず、人間の行動に関する法則が後に発見され、世の常となる日がくるだろうとボアズが信じていたことは驚くべきことである。

ルース・ベネディクトの博士論文はコロンビア大学に提出された15本目の文化人類学分野の論文であった。彼女より以前に提出された14本の論文と、第二次大戦までに提出された43本の論文も、ボアズのアプローチと同じ研究傾向を持っていた。<sup>16)</sup> ボアズの個人に対する関心の芽生えを窺い知ることができるものはルース・ブンツェルの“The Pueblo Potter: A Study of Creative Imagination in Primitive Art”(「プエブロ壺作り: 原始芸術における創造的イマジネーションの研究」)という論文だけである。<sup>17)</sup> これらの論文をみると、小さい孤立した部分から全体の構造が築き上げようとしていることが窺える。

同時代にロバート・ローウィは社会構造に関する発展的な考えを体系化し始めていた。*Primitive Society* (『未開社会』)<sup>18)</sup>は1920年に出版され、ルース・ベネディクトはローウィが博物館を去り、カリフォルニア大学に赴任するまでの期間、彼と共に一つの授業を担当していた。「平原文化における幻視」を出した後、ベネディクトは思ったことを率直に口にするジェイミー・ドゥ・アヌーロと初めて会った。ジェイミーが「あなたは書くことと言うことがまったく違う」と喜び勇んで言うと、ベネディクトは「あの論文はローウィ博士のために書いたのです。ローウィ博士をご存知ですか」と彼に言ったらしい。



表面には出なくとも、学問上の変化は確実に起きていた。ヘブリンの論文“The Idea of Fertilization in the Culture of the Pueblo Indians”「プエブロ族の文化における子孫繁栄の考え」<sup>19)</sup>が注目され、「ヘブリン以来の優秀な院生」という言い方が定着していた。1924年の夏、ボアズはズニ族芸術における創造的イマジネーションと個人の役割を調査する前段階として、ルース・ブンツェルを現地に送り込んだ。1925年にボアズは、私のフィールド・ワークの課題として「未開人における思春期の研究」を選んだ。彼は後にベネディクトにこう述べている。「マーガレット・ミードをサモアに送り込んだ時、分散論は終わりだと思っていた。新しい課題にチャレンジする時期だと思った。」こうしたボアズの変化が起きる25年前にアルフレッド・クローバーは文学から文化人類学に移り、“Decorative Symbolism of the Arapaho”「アラパホの装飾的シンボリズムについて」を書いた。<sup>20)</sup>そしてレスリー・スパイアは平原インディアンの絵付けされた皮小袋の大きさを研究し、部族によって美的感覚が異なると主張した。そしてこれをウェーバー・フェヒナーの大きさの割合の研究に関連づけた。<sup>21)</sup>しかし、当時このように新しい分野の研究が始められても、ボアズはどのような問題が先に調査されるべきかということに対して厳格で保守的な考えをもっていただけのため、これらの新しい分野の研究は続かなかった。私がサモアで取り組む課題が発表された時、アルフレッド・クローバーはニューヨークに来ており、「自分もそういう課題に取り組みたかった」と私に言った。

その頃、文化人類学者の間ではパターンという概念がすでに存在していた。しかし、パターンという概念が使われたのは、特定の文化を語るときではなく、主としてどの人間社会にもあるような普遍的なもの、たとえばテクノロジー、宗教、社会組織、美術、言語などについて語る時であった。そして文化的行動の一つ一つがどのように組織立っているのかを表すのにもパターンという概念が使われていた。1925年の春、アムステルダム通りを学生仲間と歩いていた時、すれ違った二人が「こんばんは。いい夜ですね。」と挨拶するのを聞いて、私たちは顔を見合わせ「あ、パターンだ」と同時に言ったものだった。

しかし、そのころの社会研究あるいは文化研究では、部族の行動に焦点が置かれ、個人やグループに焦点が置かれることはなかった。個人は文化全体のパターンを説明する一部にすぎなかった。外部から新しい要素を取り入れるか否かは、その要素が既存のパターンに簡単に組み込むことができるか否か、取り入れるとしたら、簡単に取り入れられるかどうかということに関わっていると考えられていた。例えば、神話のあらすじは、それぞれの文化の異なった社会組織に合うように変えられることがある。文化の他の部分とパターンが合うように、ヒーローが末の息子から長兄に、悪者が義理の父から母親の兄に変わることがある。また、話の一部、たとえば、「スター的な夫」とか「忠告的な糞」が話の筋から外され、他の部分に付け加えられることもありうる。神話を作り出す実在の人物について言えば、人々は手元にある材料を何でも使った。伝統的な話を使ったり、親族や同部族との関係において組織立った自分たちの人生のあり方などを材料に使った。新しい話が入ってくると、それを聞き慣れたものに組み替えた

ルース・ベネディクトの「模索時代(1920-1930年)」の解説に表れるマーガレット・ミードの視点(菊地・福井)

り、バラバラにし、いくつかの違った短い話に散りばめたりした。

このプロセスがどのように成り立つのかを示すために客観的に検証できるデータを使うように教えられた。そのようなデータは次のようなものであった。特定のインフォーマントから得た民話や神話を原語から一言一句記録したテキスト、詳細な部分まで復元して分析できるように写真や絵におさめられた芸術様式のデータ、そして言語データであった。もちろんこれは文書の中の言語データである。そして、性別、年齢、出生、結婚などに基づいた親族制度のデータである。

このような調査方法を導入する背景には、途絶えかけている文化を研究しているという状況があった。昔とは異なり、部族は水牛狩りをすることもなく、宴の時の焚き火にウーリカーン油を大量に注ぐこともずいぶん以前になくなっていった。文化人類学者は少数のインフォーマントを選び、一人ずつ聞き取り調査を行っていた。時には通訳を間に入れて聞き取りをしなければならなかった。文化人類学者は生きた文化に触れることはなかった。なぜならネイティブ・アメリカンの現実、連邦政府からの年金受給者であったり、収穫物の取り入れを手伝う日雇いの人たちであったり、ロデオの観客だったり、観光客にみやげ物を売る人であったりした。衣装と住居、生活の糧を得る方法、お互いの接し方、宇宙との接し方、これらすべてが調和し、美的満足感を与える統合された世界だった頃のごく一部しか彼らには残っていない。

ボアズは何よりも科学者であった。彼は信頼できる膨大なデータを使うことによって詳細をチェックすることができ、それをもとに何が欠けているかを指摘しようとした。欠如しているもの、たとえばハンモックが使われていないとか、幻視を得るための拷問の欠如とか、陶器作りの細かい点の欠如とかは、存在する特徴の分析と同等に重要であり、何かが欠如しているというのには非常に多くのデータ、理想的には、その文化のすべての神話、すべての装飾的なデザインのデータが必要であった。

当時、限られたデータを解釈するのに使える心理学的な理論は存在していなかった。心理分析理論、学習理論、ゲシュタルト心理学、行動学は後になって現れたものである。文化的データの分析には、想定できる人間の共通性、すべての人間がもっている可能性に頼るしかなかったのである。シャンドやマクドゥーガルが使い、後にラドクリフ・ブラウンがアンダマン島民<sup>22)</sup>の研究に使った直感を並べるような心理学は十分なものではなかった。その頃、コロンビア大学ではウイリアム・フィールディング・オグバーン<sup>23)</sup>が過去の心理分析の論文を使って文化の心理的側面について講義をしていた。「血の対決の起源」や「義理の母親に対するタブーの役割」の歴史に関する論争が講義の中で行われた。しかし、オグバーンが最終的に言ったことは、「文化的な説明がどうしてもつかない時のみ、心理的な説明を使いなさい」だった。「心理的」というのは、人間のもって生まれた特有の先天的な特徴を指しており、「文化的」というのは、ある社会の一員として学んだ行動を指していた。文化的理論を補うことができ、同時にそれも含めることができるような心理的理論がない限り、人間の特徴は文化的データから推測するし

かなかった。1923年という時代において、人間の特徴をつかむには、人間が自分の文化の中でどう行動するかを人間の全体像に繰り返しあてはめる以外になかった。

色々な可能性をもった一個の人間が自分の文化を「どのようにして1つの文化の一員になるか」という研究が始まる前に、ルース・ベネディクトは文化人類学がどのような役割を担うことができるのかという自分なりの考えをもっていた。しかし後には、文化と人格に関する研究を受け入れるようになり、時には使うようにもなった。そうした研究は、文化人類学だけでなく、力動的心理学の考えも取り入れていた。そしてベネディクトは、社会の中の個人またはグループを研究対象とすることが社会の文化を研究するのと同様に大切であるということに気付きはじめた。しかし、彼女が1920年代初期に身につけた文化人類学の知識は、文学的「産物」に基づいた洞察的文学研究に接ぎ木されたもので、そういった文学研究は、人間の心理、生理学的理論とは無関係であった。

ベネディクトの最初の出版物であった「平原インディアンの幻視」には、彼女のすべての作品に内在する基本的概念がすでに含まれている。その後の何年間かの間、彼女は南西インディアンの民話の索引<sup>24)</sup>を作成するために神話を読み、その要約を書いた。そしてこの分野で教鞭をとり、フィールドワークを行なった。こうした研究は、学術的で科学的で、「仕事を必要としないほどの強さ」を持ち合わせていない人にとっては絶好の時間のつぶし方だった。彼女は色々な方法で暇をつぶそうとしたが、それらに対して意味を見い出すことができなかった。やっと巡り合った暇のつぶし方は、ベネディクトが好む異質性と審美性を持った資料を扱う仕事で尊敬する教授によって高い基準が定められたものだった。

#### 参考文献

- Caffery, Margaret, Ruth Benedict: Stranger in this land, Texas University Press, 1989年、M・カフリー『さまよえる人 ルース・ベネディクト』福井七子訳、関西大学出版部、1993年
- Lapsley, Hilary. Margaret Mead and Ruth Benedict-The Kinship of Women. University of Massachusetts Press.
- H・ラブスリー『ふたりの恋愛が育んだ文化人類学—マーガレット・ミードとルース・ベネディクト』伊藤悟訳、明石書店、2002年
- Mead, Margaret. Anthropologist at Work: Writings of Ruth Benedict, New York: Houghton Mifflins, 1959年
- バイトソン・キャサリン 1993年『娘の眼から』佐藤良明、保坂嘉恵美訳、国文社

#### 注

- 1) レオナード・ブルームフィールドの妹マリー・ブルームフィールドは1923年2月に自殺した。本誌65ページにある「日記：1923年」の2月8日の記述参照

- 2) *American Anthropologist*, 24 巻, 1 号, 1922 年, 1 ~ 23 ページ
- 3) ジョン・デュイ著、ニューヨーク、ホルト出版、1922 年
- 4) 未出版の詩
- 5) 1937 年 2 月 16 日にルース・ベネディクトがジョンズ・ホプキンス大学生化学学科の E.V. マックコラム博士に宛てた手紙の中で、スタンレーについて次のように書いている。「大人になってから彼の家には、化学薬品も化学に関する本もありませんでした。彼は研究室と実験室以外の時間をエネルギーを補給するための時間に当てており、仕事から気を紛らすような趣味に使っていました。その趣味の中でも二つ特別なものがありました。一つはエンジンをいじることで、それがポンプであれ、ボートや車のものであっても、まずバラバラにします。もう一つの趣味は写真で、特に現像や印刷の化学処理を試すのが好きでした。夏休みの間も、ジャーナルの編集長としての仕事の時間が許せば、体をリフレッシュしていました。ニューハンプシャーでの夏は、人と関わらずにすみ、のんびりできるので気に入っていました。何年もの間、彼はウィニペソーキー湖の辺りでずっと休暇を過ごしていました。また彼は旅行するのが好きで、カナディアンロッキーや、レニアー山公園へ行ったり、アラスカや、ノースケープへ船で行ったりしました。ご存知のように彼は異常に高い血圧に悩まされていましたが、なるべく邪魔が入らない規則正しい生活を送ることでその辛さを乗り越えていました。」
- 6) 「日誌：1912 ~ 1916」の中の 1914 年 11 月にベネディクトは次のように書いている。「私が好んでやることは、奴隷のように扱われ、変化を求めている過去の女性の立場に自分の身をおき、「新しい女性」の立場から伝記的な論文を書くことである。」 本著 132 ページ参照
- 7) ヴァッサー・カレッジの旧友からの手紙
- 8) ペンネーム「ジョン・メイン」で出版された本：*The Old Fashioned Woman, Primitive Fancies about the Sex*、ニューヨーク、パットナム出版、1913 年；*Social Rule, a Study of the Will to Power*、ニューヨーク、パットナム出版、1916 年；*Religious Chastity, an Ethnological Study*、ニューヨーク、1913 年
- 9) 1940 年 7 月 19 日にフランツ・ボアズがルース・ベネディクトに書いた手紙の中のコメント参照。 本著 418 ページ参照
- 10) アレクサンダー・A・ゴールドデンワイザー著、ニューヨーク、クノッフ出版、1922 年
- 11) *Modern Quarterly*, 11 巻, 6 号, 1940 年, 32 ~ 33 ページに記載されたルース・ベネディクトが書いたゴールドデンワイザーへの追悼文参照
- 12) *Memoirs of the American Anthropological Association* 29 号, 1923 年, 1-97 ページ
- 13) この時期のボアズの立ち位置については、1916 年 1 月 7 日『ニューヨーク・タイムズ』に掲載された手紙「なぜドイツ系アメリカ人はアメリカを非難するのか」を参照のこと
- 14) フランツ・ボアズの講義ノートによる
- 15) フランツ・ボアズの講義ノートによる
- 16) William L. Thomas, Jr. 監修、1955 年に New York Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research から出版された *Yearbook of Anthropology* に掲載された 1901 年から 1941 年にコロンビア大学文化人類学部に提出された博士論文のリスト (703-5 ページ参照)
- 17) *Columbia University Contributions to Anthropology* 8, コロンビア大学出版、ニューヨーク、1929 年
- 18) リバーライト出版、ニューヨーク、1920 年
- 19) Herman K. Haeblerlin, *Memoirs of the American Anthropological Association* 3, 1 号, 1916 年
- 20) *American Anthropologist* 3, 2 号, 1901 年, 308-36 ページ

- 21) *An Analysis of Plains Indian Parfleche Decoration*、シアトル、ワシントン大学出版、1925年
- 22) A. R. Radcliffe-Brown, *The Andaman Islanders, a Study in Social Anthropology*、ケンブリッジ、ケンブリッジ大学出版、1922年
- 23) William Fielding Ogburn, *Social Change with Respect to Culture and Original Nature*、ニューヨーク、ヒューブッシュ出版、1922年
- 24) ここに述べられた索引は出版されなかった